



平成26年10月に東京で開催された「日本橋 京橋まつり」で、能登の奉燈を披露しようと、田村さんが中心となって準備してきた七尾市出身のメンバーたち。東京のご真ん中で奉燈を披露し、多くの観客を魅了させた。
左から、西田大和(石崎町)、田村祥太(阿良町)、霞流隼大(石崎町)、清水大輝(湊町)、下段 大岡良輔(魚町)

能登が大好き！



世界の視点で見ても すごくステキな場所

ハウエル・マーク・エドモンドさん

●住所／南藤橋町
●出身／アメリカ・カリフォルニア州
●職業・英語教師

ハウエルさんは、カリフォルニア大学サンタバーバラ校に在籍している時、世界の歴史を専攻していた。なかでも日本の歴史に一番興味を持ち、日本に行つてみたいと思うようになり、英語の講師として来日(金沢市)。平成15年には七尾市にあった英会話教室の講師を務めた。その後、独立をして、今では七尾高校をはじめ、いろいろな学校で英語を教えたり、自ら英会話教室を開いたり忙しい日々を送っている。また、七尾市の女性と縁があつて結婚。小学1年生になる子どもと幸せに暮らしている。そんなハウエルさんに七尾のことを聞いてみた。

「故郷ではロサンゼルス近郊の都市に住んでいたのですが、最初は七尾市での暮らしが心配でした。けれど、七尾市の暮らしが私に合っていたのでしょね。

後でよく考えると、いろいろな人に助けられていたんです。最初の英会話教室の経営者の方や奥さんの両親、英語を教えた生徒の皆さんや私と接してくれた多くの人たち。本当に出会いに恵まれていると思います。これまで楽しく七尾市で生活できたのも、七尾の人の気持ちや本音が温かいからだと思っています」と、常に七尾の人たちへの感謝の気持ちは忘れないと語ってくれた。

「七尾市は、人と人とのつながりやコミュニティがすごいんですね。祭りの団結力や地域の連帯感は素晴らしい。七尾に住む皆さんは、当たり前のことだと思うかもしれませんが、改めてそんな雰囲気誇りに思つてみてはどうでしょうか」と鋭い視点から語るハウエルさん。



心など、世界に自慢できるものがたくさんあります。私の願いは、そんな素晴らしいものを守り、子どもたちに伝えていってもらうことです。私の子どもも、将来大学進学などで二度は都会に行くと思いますが、必ず七尾市に戻ってきてほしいと願います。こんな地域は他にないと思いますから」と七尾市民としての願いを込めて語ってくれた。

故郷のために！ ボクができることをやる

田村祥太 さん

●住所／東京都練馬区
●出身／阿良町

七尾の祭りが好きで好きでたまらなく、大学進学の際に、故郷七尾を離れることをためらったという田村さん。大学卒業後、必ず地元へ戻つてくると心に誓つて上京してから4年。平成27年4月から、県内の企業に就職することが決まり、念願の故郷へ戻つて来ることになった。

「七尾で生活をしていたときは、何もかもが当たり前で、七尾の何がいいのかわかりませんでした。故郷を離れ、東京で暮らしていると、地元の素晴らしさに気づくことがあるんです」と、都会での経験と故郷への思いを話し始めてくれた。

「東京では、個人の生活が中心で、人を気遣うことがないと思うときがあります。そんな時、七尾の祭りを思い出すんです。お互いを常に思いやり、人

を包み込んでくれるような、そんな温かい雰囲気。また、四季を感じることもなくなりました。特にこれから雪の季節なので、七尾の冬が恋しくなります。あと食べ物ですね。居酒屋でアルバイトをしているからか、七尾の魚に関心を持つようになりました。これから魚のおいしい季節ですね。七尾の魚を食べたいです」と故郷七尾に思いをはせていた。

田村さんは、七尾に戻る目的意識も明確にしている。「テレビなどで、少子高齢化とか人口が減少していくとよく聞きます。そんなことになると祭りに影響が出てきます。私は、全国に誇れる七尾の祭りの担い手になりたいと思います。そうなることで、私を育ててくれた親や地域の人たちに恩返しになると思っているからです。社

会人としてこれからですが、七尾には、祭りや食べ物、人や風土など、日本に誇れるものがたくさんあります。世代が代わっても受け継がれるような七尾であつてほしいと思います。都会で感じたものを大事にして、4月から地元に戻つて頑張りたいと思います」としっかりと考えた話をしてくれた。

